

國學院大學學術情報リポジトリ

「お存じ」「お存知」をめぐって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-02-24 キーワード (Ja): 「お存じ」, 「お存知」, お+漢語, 四つ仮名, 語種による「お/ご」の使い分け キーワード (En): 作成者: 上出, 大河 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000062

「お存じ」「お存知」をめぐる

On the connection between the waiter prefix ‘o’ and ‘Zonji’ and ‘Zondi’.

上出大河

キーワード：「お存じ」「お存知」 お+漢語 四つ仮名 語種による「お/ご」の使い分け

关键词：お存じ お存知 お+汉语词 四つ仮名 不同语种的“お/ご”使用区分

要旨

「存じ」及び「存知」に接頭辞「ご」が付された「ご存じ」「ご存知」は広く聞かれる表現であるが、「お」が付された「お存じ」「お存知」に関しては一定の用例が確認できる表現であるにも関わらずその存在はあまり知られていないようである。

本稿では、このような現状を踏まえ、「お存じ」「お存知」が少なくとも1800年代後半から現代まで用例が確認される表現であることをここに報告する。また、用例から、当該表現の用法、機能、話者属性による検討を行い、「お存じ」「お存知」が「ご存じ」「ご存知」よりもフォーマリティーの低い場面で用いられる表現とは考え難いことや、ある知的階層に属す話者に使用が偏るといった位相性が認め難いこと等について指摘した。

また、「存知」が、四つ仮名の混同以降「存じ」と同語との認識が強まっていたために、「お存知」との語形が生じたのではないかという生成要因に関わる可能性についても言及した。

摘要

“存じ”和“存知”的前面加上前缀“ご”的“ご存じ”和“ご存知”的表达方式被大家熟知，但是带有前缀“お”的表达方式“お存じ”和“お存知”，虽然是可以利用一定的例子来确认的表达方式，但它的存在似乎并不为人所知。

在本论文中，基于此种情况，我将在这里报告“お存じ”和“お存知”的用法至少从1800年代后期一直延续到现在。此外，通过用法示例，从表达的用法、功能和说话者属性进行分析，很难判别比起“ご存じ”“ご存知”，“お存じ”“お存知”是在正式程度较低的场景下使用的表达。同时也很难判别“お存じ”“お存知”的使用偏向在某个知识阶层。

此外，关于“お存じ”的词形出现的可能性，推断是因为“四つ仮名”混同以后，“存知”和“存じ”被认为是同义词而形成的。

1. 序

「知る」「知っている」の尊敬語として用いられる「ご存じ」「ご存知」は一般に広く用いられてきたが、「ご」ではなく「お」が付された「お存じ」「お存知」という表現が存在することについてはあまり広く認知されていないようである。

管見の限り先行研究においてもこれらの表現を考察の対象としているものは存在しないため⁽¹⁾、本稿においては、「お存じ」「お存知」の用例が一定数確認できることをここに報告し、想定しうる生成要因等に関しても簡単に考察を加えるものとする。

2. 「お存じ」「お存知」を対象とした用例調査及び分析

本節では、「お存じ」「お存知」の用例を列挙する。

用例調査に際しては、当該表現が一定期間に亘って用いられていることを明示するため、複数の検索手段を用いて、得られた用例をそれぞれ提示するものとする。

具体的には、

- ・「次世代デジタルライブラリー」を利用し、「国立国会図書館デジタルコレクション」でインターネット公開されている著作権保護期間満了図書を対象とした検索
 - ・ヨミダス歴史館を利用した記事検索
 - ・World Wide Web上で最も多く使われている検索エンジンである Google の検索エンジンを用いて「"」を付し完全一致検索
- 等である。

それぞれ検索条件での該当数と共に用例を紹介することとするが、OCRに際する字形の誤認識や各種語形を批判的、揶揄的に紹介しているものも含まれるため実際の用例数とは必ずしも一致しない。なお、以下に列挙するインターネット上の用例やコーパス調査で得られた用例は全て2022年11月25日最終閲覧のものである。

2.1.「お存じ」

<次世代デジタルライブラリー> 該当約368件

・1800年代

(1)「お存じ偏執の沙汰なるやと」

(編輯人不詳『寛永箱崎文庫 今古実録』1882年)

(2)「百姓有難仕合お存じ奉り」

(編輯人不詳『佐倉義民伝 今古実録』1882年)

(3)「残念至極お存じは尤も安藝言葉巧みにして」

(編輯人不詳『伊達顕秘録 今古実録』1882年)

(4)「互ひの御為め能からふ様お存じ上る」

(柳条亭華彦『南海紀聞音信』1884年)

(5)「御評判を、お存じないとは申されまい」

(藤岡作太郎『日本風俗史』1895年)

・1900年代

(6)「Can you give me the address of? 某氏の住所をお存じですか」

(松島剛編『簡易会話編』1901年)

(7)「オキザリスといふ花をお存じですか。」

(相馬泰三『六月』1914年)

(8)「神様は自分のことをお存じないかの様に思ふが」

(増野道興『天啓の声』1918年)

(9)「彼方お存じでしやう。お存じないの。」

(野口米次郎『邦文日本少女の米国日記』1925年)

(10)「よくお存じなのねえ、誰におききになったの?」

(加藤一夫『キリスト(十字架への巻)』1947年)

<ヨミダス歴史館> 該当0件

<Google> 該当約7350件

(11)「バイオテクノロジー部会員の皆さまは、ウンウントリウムという元素をお存じだろうか。」

(横山憲二「来年度20周年を迎えるバイオテクノロジー部会を思う」(『公益社団法人日本化学会バイオテクノロジー部会 NEWS LETTER』2016年)

(12)「ゲスト様もちろんお存じで、喜んで頂きました。」

(高齢者安心住宅サザンクロス スタッフBlog 2020年09月28日)

(13)「こちらからの案内に沿って、製品返送のご手配にお手間頂きたくお存じております。」

(GREEN FUNDING 活動報告 2020年11月17日)

(14)「実はこのヒートショックでの死亡率は、交通事故よりも多いことをお存じでしたか？」

(高嶋工業 窓ブログ 2020年12月19日)

(15)「まずは皆さんがよくお存じのタンパク質です。」

(岡山サロンスタッフブログ 2022年04月29日)

2.2.「お存知」 該当約84件

<次世代デジタルライブラリー>

・1800年代

(16)「貴婦人が私を御愛顧にして下さいますのは此上もなく難有いとお存知ますが」
(宇田川文海『狂花』1889年)

(17)「ヲヤ貴君様はお母様のお名をお存知なされませぬ」
(菊亭静『葵の嫩葉 前將軍絵物語』1890年)

(18)「お存知の通りお釈迦さまは幼名を悉達と申しまして」
(加藤咄堂『勅語と仏教』1893年)

(19)「父の氣質をお存知ない」
(本吉欠伸『南蛮鉄』1894年)

(20)「殿様が何か、お存知の事も有るのかと」
(朝倉蘆山人『名人甚吉』1897年)

・1900年代

(21)「妾の事情をお存知でありながら、妾に結婚をお勧めなさるからは、」
(大沢天仙『恋の短銃』1903年)

(22)「貴君は私の父をお存知でせう？ いいえ、存じません」

(佐久間政一編『独逸語新階梯』1916年)

(23)「よくお存知のやうに、私は温度と精力を具へさせるのです。」

(山柘儀重『教育を直視して』1930年)

(24)「宮中のお覚えの目出しお方、悉しい事情をお存知なのは必定」

(生田葵『日野俊基』1943年)

(25)「その他は諸君もよくお存知の地方々々の民謡であります。」

(佐藤惣之助『民謡の研究』1946年)

<ヨミダス歴史館> 該当1件

(26)「応仁の乱をお存知ない歴史の先生」

(読売新聞1926年01月4日朝刊)

<Google> 該当約51800件

(27)「京都には数多くの神社仏閣が存在する事は皆さんもお存知の通り。」

(omoniの主につき 2016年12月14日)

(28)「皆さん、気象の天気予報をお存知ですね。」

(BayFM Guest Talk2020年01月13日)

(29)「お存知の通り、当店、だるま餃子にはたくさんのだるまさんがいます。」

(だるま餃子ブログ 2020年09月18日)

(30)「皆様「水の4大特性」という言葉をお存知ですか」

(JSS深井スイミングスクールスタッフブログ 2021年06月15日)

(31)「お存知の方いるかと思いますが目のクマをとる美容外科手術をしました」

(女性専用ファンタジーマッサージ銀座秘密基地 写メ日記 2021年07月12日)

なお、該当用例数が明らかなため、ここには含めなかったがTwitterを利用した調査でも「あと、ガンダムXってお存じですか?」(@exia_repair_ex 2022/09/07)や「結構有名なお店なので、きっと言えばお存知だと思います。」(@yukawareiko 2018/10/08)等多数の用例が確認できる。

2.3.用例の量的な検討

上に列挙した通り「お存じ」「お存知」は決して孤例ではなく、それぞれ一定量

の用例が確認される類の表現である。またその用例の確認できる期間という観点でも少なくとも1800年代後半から現代に至るまで用例が見られるため、その表現が生じて以降ある特定の期間にのみ使用されたというような類の表現ではないこともうかがいしることができる。

一方、「次世代デジタルライブラリー」を用いた調査では、2022年11月1日に全文検索対象が江戸期以前の崩し字資料にまで拡大されているのにも関わらず、古典籍からの用例が得られなかった。この点については、そもそも「お存じ」「お存知」の用例が江戸期以前に見られなかったという可能性と採録資料の偏りによる影響の可能性の両者を想定する必要がある。

また、検索手法による用例採集の限界という点でいえば、「次世代デジタルライブラリー」で採取可能な用例は著作権保護期間満了図書に限られる、ということにも留意する必要がある。著作権法第51条の2項には、「著作権は、この節に別段の定めがある場合を除き、著作者の死後（共同著作物にあつては、最終に死亡した著作者の死後。次条第1項において同じ。）七十年を経過するまでの間、存続する。」との記述が見られるため、現在「次世代デジタルライブラリー」で用例が検索可能となるのは江戸期以前の資料から70年以上前までの用例に限定される。他方、Googleの検索エンジンで用例採取可能となるのは当然であるがインターネット普及以後の用例が圧倒的多数である。これら検索手段の差異を踏まえれば、当該表現の通時的な傾向の一端を大まかにではあるが推測ができるかもしれない。

以下、各検索手段によって得られた該当数を改めて【表1】として示す。

【表1】各検索手段によって得られた該当数の差異

	次世代デジタルライブラリー	ヨミダス歴史館	Google
「お存じ」	約368件	0件	約7350件
「お存知」	約84件	1件	約51800件

ヨミダス歴史館による検索では該当数が1件にとどまるためここから何らかの傾向を推し量ることは困難であるが、「次世代デジタルライブラリー」とGoogleの検索エンジンを用いた検索での該当数の差異には興味深い点が存在する。「次世代デジタルライブラリー」を用いた検索では用例数の多さが「お存知」よりも「お存じ」が優勢である一方、Googleの検索エンジンを用いた検索では「お存じ」

よりも「お存知」が優勢であり、用例数の差異が逆転している。

先述の通り「次世代デジタルライブラリー」は最低でも70年以上前の用例が対象となっているため、検索可能な用例が比較的近年に偏るGoogleの検索エンジンを用いた検索とは期間的な隔たりが想定される。この点を考慮すれば、「お存じ」と「お存知」の用例数の比率が「お存じ」優勢から「お存知」優勢へと歴史的に変化してきている可能性がある、と捉えることも可能であろう。

3. 「オ-漢語」型としての「お存じ」「お存知」

先に列挙した「お存じ」「お存知」は、漢語に「お」が付された語形であるため、本節では「オ-漢語」型の表現の特徴について先行研究を振り返り、その特徴が「お存じ」「お存知」に適用しうるかについて検討を加える。

3.1. 語種原則とその例外について

接頭辞「ご」と「お」の使い分けに関する研究、考察は古くから形態論、統語論等の立場から多数蓄積されてきた。その中でも最も広く支持され、原則として認められているのは語種を分類指標とする「語種原則」（和語には「お」が付されやすく漢語には「ご」が付されやすいという原則）に基づく使い分けである。

田中（1972）が国立国語研究所による「新聞の語彙調査の結果」に基づいて語種原則の有効性を確認している通り、原則としての有効性は明らかであるが、一方で「お食事」「お盆」等の「オ-漢語」型や「ごゆっくり」「ごもっとも」等の「ゴ-和語」型等語種原則において例外とされるような例も相当数確認されるため、この分野における研究ではこの問題をどのように処理するのか、という点がクローズアップされることが多い。

例えば、菊地（1994）は、「「お」か「ご」かで＜機能＞を区別する傾向のある語も、稀にある。「ご返事」「お返事」は、前者が尊敬語・謙譲語 A、後者が美化語（たとえば幼稚園言葉）という使い分けの傾向が、かなりの部分で認められそうである」と指摘しており、「オ-漢語」型と「ゴ-和語」型の両方をとる語句には機能による使い分けが存在するのではないかと、この見解を表明している。

また、西隈（2004）が「オ-漢語」型と「ゴ-和語」型について前者は「フォーマリティーのそれほど高くない表現」、後者は「フォーマリティーの高い表現」とい

う差が生じるとの指摘を行った例等その他にも多数の先行研究が発表されているため、ここですべてを取り上げることにはできないが、次節では、本稿で問題とする「お存じ」「お存知」にも菊地（1994）や西隈（2004）で述べられたような説明が成り立つのか、という点について簡略的に述べることにしたい。

3.2. 「オ-漢語」型としての用例分析

「オ-漢語」型として「お存じ」「お存知」の用例を先行研究と照らしてみれば、「オ-漢語」型は比較的フォーマリティーの低い場面で用いられる傾向が認められるとした西隈（2004）の指摘には必ずしも当てはまらないように思われる。用例の多くは「ご存じ」「ご存知」と任意の置換が可能であるように思われる他、話者の属性という要素を考慮しても「お存じ」「お存知」が「ご存じ」「ご存知」よりもフォーマリティーの低い表現であるとは考え難い。例えば、(8)の話者増野道興は敷島大教会の二代会長であり、このような属性の人物が「神様」に対してフォーマリティーの低い語を用いていると捉えるのは不自然であるし、(26)のように全国紙が見出しとして掲げている例も確認されたため、少なくとも表現意図のレベルで「お存じ」「お存知」が「ご存じ」「ご存知」よりもフォーマリティーの低い表現とは捉えられていなかったと考えるのが妥当ではあるまいか。菊地（1994）における機能による棲み分けという指摘についても同様に想定し難く「お存じ」「お存知」は菊地（1994）の指摘が当てはまる例とも見られないのである。

また、稿者の内省から考えると「お存じ」「お存知」は少なくとも現代ではいくらか文法的適格性を欠いているようにさえ思われる表現であったため、現代の用例は、いわば習熟を欠くプリミティブな使い方なのではないかとも思われたが、実際の具体的な使用者を知ると、そうも考えにくい。(11)の発話者である横山憲二や(28)の発話者服部克巳などはそれぞれ博士号を取得した現職の大学教授であり、一定レベル以上の知的水準にある人物と考えてよいであろう。この点からは、言葉遣いへの習熟を欠く話者だけが集中的に用いるという類の位相性はこの表現に認められない、ということがうかがえる。

4. 「お存じ」「お存知」の生成要因に関して

先述した「お存じ」「お存知」のような表現が生じる要因について何らかの推測

を行うとすれば、「存じ」、「存知」の基礎的な語誌の確認から行う必要がある。

4.1. 「存じ」「存知」の基礎的語誌

まず留意したいのは、「存じ」「存知」の両語が旧来的には別語であるという点である。この点についてはともすると忘れてしまいがちであるが、中田祝夫ほか編『古語大辞典』（1983）や日本国語大辞典第二版編集委員会編『日本国語大辞典第二版』第8巻（2001）、室町時代語辞典編集委員会編『時代別国語大辞典：室町時代編』3巻（2012）等通時的視点を重視する各種辞典類にそれぞれ別語として項が立てられていることからもうかがいしることができる。

なお、両語の意味について各種辞典類では以下のように記述されている。

<存じ>

- ・「知っていること。知れわたっていること。承知。」

中田祝夫ほか編『古語大辞典』（1983）

- ・「知っていること。承知していること。思っていること。」

日本国語大辞典第二版編集委員会編『日本国語大辞典 第二版』第8巻（2001）

- ・「「思ひ」の謙譲語。承知。「存じの前」「存じの外」などの言い方で用いられる。」

室町時代語辞典編集委員会編『時代別国語大辞典：室町時代編』3巻（2012）

<存知>

- ・「思っていること。心得ていること。」

中田祝夫ほか編『古語大辞典』（1983）

- ・「(1) 存在を知っていること。知って理解していること。(2) 心得て覚悟していること。」

日本国語大辞典第二版編集委員会編『日本国語大辞典 第二版』第8巻（2001）

- ・「(1) 自ら思うところ。(2) 自ら知っていると、知っていること。多くサ変動詞として用いられる。」

室町時代語辞典編集委員会編『時代別国語大辞典：室町時代編』第3巻（2012）

辞典類の記述にはそれぞれ多少の幅があるが、共に認知・理解に関わる語であるという点で大きくは一致しており、「存じ」「存知」が、意味の上で類似してい

たことをうかがわせる。また、阪倉ほか編(1971)には「存知」という語のほか、動詞に基づいた「(御) 存じ」という語があったのであるが、ヂ・ジの音韻上の区別が失われるとともに、語としての区別も後には失われたものであろう」との記述が見られ、このような記述を踏まえれば、意味的、音声的近似のために後世では両語が別語であるとの認識が希薄していったものと捉えてよいであろう⁽²⁾。

活用の面では、古くは「存知」がサ変動詞として活用される際、そのテ形は「後日の訴訟を存知して」(『平家物語』巻一)のように「存知して」となるのが一般的であった。しかし、近年時折確認される「鳩山氏がどんなにいい加減な人間か存知しておりますので。」(@aitohikarinari 2021/06/06)や「お名前はもちろん存知てたんですけど、鍵垢さんでお名前が変わっていたのでどちらがいいかと思ひまして」(@HeureuxOignon 2021/06/07)のような「存知て」は、以前のサ変動詞「存知」ではなく、「存じる」に「て」の付いた「存じて」の表記として使われているだけである。このような例も、現代において両語がもはや別語とは認識されていないことを示しているものと思われる。

4.2. 生成要因について

一字漢語「存じ」二字漢語「存知」は語種原則に従えばどちらも「ご」を選択するのが自然であると考えられるが、実際には用例調査の結果で示した通り和語相当の「お」を選択する用例が一定数見られる。この表現は3節で触れた通り、先行研究において「ご返事」「お返事」の例などを用いて指摘されてきた「オ・漢語」型の特徴から部分的に逸脱していると言わざるを得ないため、「存じ」「存知」がどのような要因で「お」を選択しうるのであるのかという問いに答えるためには、新たな仮説をたてる必要がある。

まず、「存じ」のような一字漢語の場合と「存知」のような二字漢語の場合とは接頭辞の選択に関する傾向が異なるということについては注意しなければならない。二字漢語の場合と比較して、一字漢語の場合は「お」を選択する例が多く見られ、「お感じになる」、「お禁じになる」、「お案じになる」、「お信じになる」等の用例を採取することは容易である。これは、中村(2006)の指摘によれば、「漢字一字+じる」型の漢語動詞は、「音節数が短く、漢語を基にしているという意識が薄れやすかった」ために和語の「[～ずる(文語)：～じる(口語)]」への類推が働

いたということになるが、中村(2006)のように和語への類推と捉えるか否かという問題はさておいても、このような傾向を踏まえれば「お存じ」という表現自体は必ずしも特異なものとは言えないであろう。

このような点からさらに発展して「お存知」の生成要因を想定すると、「お存知」については、特異な語形ではなく元々生じうる語形の「お存じ」と同語との認識が強まったために後発的に生じた語形ではないか、と捉えることも可能であるかもしれない。また、この点については推測の域を出ないためさらなる調査を行う必要が認められるが、他方で「ご存じ」については「ご存知」と同語との認識が強まったために生じた表現であると想定することも可能であろう。

5. まとめ

以上、「お存じ」「お存知」なる表現が一定数確認されること等を報告してきた。

稿者がここに報告した「お存じ」「お存知」については、「ご存じ」「ご存知」と比較すれば用例が少ない表現であるが⁽³⁾、「お存じ」「お存知」は、少なくとも1800年代後半から現在まで一定量確認できる表現であり、言語学的観察の対象とすることは充分可能な表現であると考えてよいであろう。本稿のみでは未だ史的な変遷等について十分に論じ切れていないため、稿者の課題とするとともに今後の研究の進展を俟ちたい。

以下、本稿において明らかになったと思われる点について簡単に記述し、まとめる。

- 一、「存じ」「存知」に接頭辞「お」が付された表現、「お存じ」「お存知」は少なくとも1800年代後半から現代に亘って継続的に一定量の用例を確認することができる。
- 二、「お存じ」優勢から「お存知」優勢へと両語の用例数の比率が歴史的に変化してきている可能性がある。
- 三、「お存じ」「お存知」は、「ご存じ」「ご存知」よりもフォーマリティーの低い表現であるとは想定し難く、また使用する話者の位相性も認め難い。
- 四、元々生じうる語形である「お存じ」と同語との認識が強まったため「お存知」が後発的に生じた可能性があり、一方、「ご存じ」についても「ご存知」

からの類推で生じた可能性がある。

注

- (1) 尊敬表現「ご存じだ」「ご存知だ」については、既に天沼(1981)、碁石(2009)等で考察がなされている。
- (2) 現代では、「ご存じ」「ご存知」は同じ語の別表記と捉えるのが一般的となっている。例えばNHK放送文化研究所のインターネットページに「放送現場の疑問・視聴者の疑問」への回答として「ご存じ」「ご存知」の用法についての説明が見られるが、ここでは「ご存知」の「知」を当て字とする解説が行われている。(https://www.nhk.or.jp/bunken/research/kotoba/20180201_4.html なお最終閲覧日は2022年10月15日)
- (3) Google の検索エンジンを用いて「〃」を付した完全一致検索を行ったところ、該当数は、「ご存知」は約1,140,000,000件、「ご存知」は約951,000,000件であり「お存じ」、「お存知」と比較すればいずれも量的に大きく上回っている。

辞典類

中村幸彦ほか編(1987)『角川古語大辞典』3巻、角川書店
西尾実ほか編(2011)『岩波国語辞典第7版 新版』、岩波書店
日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編(2001)『日本国語大辞典：第二版』8巻、小学館
室町時代語辞典編集委員会(2012)『時代別国語大辞典：室町時代編』3巻、三省堂

参考文献

天沼寧(1981)「ご(御)存じ：ご(御)存知」、『大妻国文』第12巻
菊地康人(1994)『敬語』、角川書店
碁石雅利(2009)「「ご存じだ」とその周辺」、『文学研究』第22号、聖徳大学短期大学部国語国文学会
阪倉篤義ほか編(1971)『講座国語史』第3巻、大修館書店
田中章夫(1972)「「オ」のつくことば・「ゴ」のつくことば」、『国文学解釈と鑑賞』465号、至文堂
中村雅之(2008)「愛する・感じる・嫉妬する——「漢語+する」について」、『KOTONOHA』第63号、古代文字資料館
西隈俊哉(2004)「『お』と『ご』の使い分け」、『月刊日本語』11月号、アルク